立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信

第5号
2011.4.1

プランゲ文庫に見る占領期の乱歩

井川充雄

戦時下には当局に睨まれ、事実上の休業を余儀なくされた乱歩は、疎開先で終戦を迎えた。池袋一帯も空襲で焼け野原となったが、乱歩の家は奇跡的に焼け残った。しかし、一九四五年十一月はじめに疎開先の福島から東京に戻ったあとも、乱歩は新作の執筆に取りかかることはしなかった。その代わり、戦争で途絶えていた英米の探偵小説を読みあさることに時間をあてた。「町を歩いて見ると、焼け野原の中に、おびただしい露店が店をひろげていて、古本屋もあり、アメリカ兵の読み捨てたポケット本なども並んでいた。驚いたことには、アメリカ兵が塹壕の中で読んでいた前線文庫の大部分が探偵小説なのである。長いあいだ西洋の探偵小説に餓えていた私は、それに飛びついて行った。そして、手に入るかぎりのものを集めて、読み耽った」(江戸川乱歩『わが夢と真実』。ここでの引用は、『江戸川乱歩全集第三〇巻』光文社、二〇〇五年、二三二ページによる。)のである。さらには、「アメリカ軍が放送会館の一階に開いてくれた図書館(後に日比谷映画劇場前に移った)に出かけて、探偵本をあさった。この図書館へ行き出したのは昭和二十年の年末か、二十一年の正月で、探偵作家、翻訳家のうちでは私が一番早かったのではないかと思う。私はそれ程餓えていたのである。『クイーン雑誌』をはじめて見たのも、この図書館においてであった」(同二三三～二三四ページ)という。GHQ内のCIE(民間情報教育局)は、全国二三カ所にCIE図書館を設置したが、なかでも東京はもっとも早く一九四五年十一月に開設した。したがって、乱歩は開設からわずか一ヶ月も経たないうちに通うようになったということになる。

少年物以外で、乱歩が戦後はじめて発表したのは『断崖』という作品で、これは『報知新聞』に一九五〇年三月一日から十二回にわたって掲載されている。したがって、それまでの四年あまりは英米の探偵小説を読んで、自己の中に蓄積していったのだと考えることができる。

ところで、占領期にGHQは、出版物の検閲を行った。これを担当したのは、民間検閲部隊(CCD)という部署で、日本国内で出版されたあらゆる図書、雑誌、新聞、さらには学級新聞、社内報、青年団報のようなミニコミ誌も検閲の対象とした。検閲は、当初は事前検閲であったが、その後、順次、事後検閲へ移され、一九四九年一〇月に終了した。

検閲の終了とともにCCDは廃止されたのであるが、検閲のために提出され、保管されていた大量の出版物の処分が問題となった。そのとき、マッカーサーのための戦史の編纂作業にあたっていた歴史学者のゴードン・W・プランゲは、この資料の歴史的価値を見いだし、廃棄されるのを食い止め、検閲の資料は米国メリーランド大学へ移管されたのである。現在は、「ゴードン・W・プランゲ文庫」という名称で、同大学のホーンベイク図書館に所蔵されている。

その後、日本の国会図書館は、メリーランド大学との共同事業として

―目　次―

〈エッセイ〉プランゲ文庫に見る占領期の乱歩　井川充雄
〈研究ノート〉猿のお七・牛のお七　丹羽みさと
〈資料紹介〉「一年間の早稲田生活より得たる感想」　落合教幸
〈紹介〉「江戸川乱歩、蔵の中から」展
〈編集後記〉

一九九一年から目録作業を開始し、さらに九三年から九六年にかけてマイクロフィルムに撮影した。したがって、今では、国会図書館の憲政資料室でも簡単に見ることができる。

ただし、これは、雑誌のマイクロフィッシュはタイトル数一万三七八七、マイクロフィッシュ数六万三一三一、推定ページ数六一〇万、新聞のマイクロフィルムは一万八〇四七タイトル、三八二六リール、推定紙面一七〇万ページという膨大なもので、宝の宝庫であるとともに、見たい記事を見つけるためには、「干し草の山から針を見つける」ような粘り強い根気が必要であった。

そこで、威力を発揮するのが、早稲田大学の山本武利教授が主宰する二〇世紀メディア研究所が作成・公開した占領期新聞・雑誌情報データベースある。これは、プランゲ文庫の全雑誌の記事について、著者名、タイトル名等で検索することのできるデータベースである。雑誌については、すでに入力が終わり、現在は、さらに新聞記事の入力が進められている。同研究所のホームページ(http://m20thdb.jp/login)からアクセスすることが可能である。このデータベースのおかげで、これまで忘れ去られていた数多くの記事が見いだされている。

こころみに著者名もしくはタイトル名に「江戸川乱歩」と入力すると、あわせて二五〇余がヒットする(ただし、一部には重複もある)。これは、一九四五年十一月から四九年一〇月の四年間の間にもかなりの数に上り、決して乱歩の創作意欲は衰えていなかったようにも見える。ただ、よく見てみると、多いのはリバイバル(すでに発表した作品の再掲)である。「人間椅子」「何者?」「D坂殺人事件」等々の戦前に発表した傑作が様々な雑誌に再掲されたことがわかる。

作品以外で目につくのは、やはり英米の推理小説を紹介したエッセーである。岩谷書店発行の『宝石』、筑波書林発行の『ロック』、東西出版社発行の『旬刊ニュース』、雄鶏社発行の『雄鶏通信』などを舞台に、古本やCIE図書館で読み漁った成果を次々と発表している。このうちの一つ「最近のアメリカ探偵小説界」(『雄鶏通信』二(六)、一九四六年四月)を実際に見てみると、これは前述の前線文庫の一つ『軍用叢書』に収録された探偵小説を紹介する記事で、エラリー・クイーンやスタンリー・ガードナーなどの名を見ることができる。

さらに占領期の乱歩にとって、雑誌等の主催する座談会に出席することが多かったこともわかる。その一つに雑誌『警友』が開催した座談会「探偵小説家刑事座談会」があった。この雑誌は、神奈川県警察部警務課発行というものであるが、これが一九四六年十月十八日に開いた座談会に乱歩は、大下宇陀兒、水谷準、木々高太郎、城昌幸、大島十九郎とともに出席している。他の出席者は横浜地方裁判所の安倍裁判所長や神奈川県警察部の三谷警察部長ら裁判所や警察の幹部という異色の組み合わせであった。こうした座談会が、県警察部主催で開かれたことは、「きわめて戦後的で、新しい時代を予感させる光景」(石川巧「犯罪科学と乱歩ミステリー」藤井淑禎編『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、二〇〇四年、一一七ページ)だった。この座談会で、乱歩は嘘発見器の導入などについて発言している(「座談会：探偵小説家刑事座談会(一)」『警友』一(八)、神奈川県警察部警務課、一九四六年十二月)。

この頃は、小平事件、帝銀事件と言った社会の耳目を集める不可解な事件が続いたこともあり、そのたびに乱歩は座談会に招かれたり、雑誌や新聞にコメントを寄せたりしている。戦前にも現実に起こった事件についての乱歩の発言が新聞等にたびたび掲載されていたことは、成田康昭氏が本通信の第三号で指摘しているとおりである。これは、藤竹暁氏が『都市は他人の秘密を消費する』(集英社、二〇〇四年)の中で述べているような都市化に伴って生じた「一億総探偵現象」とも通じるものと言えよう。特に、占領期には、『犯罪実話』『オール実話』といったいわゆる「実話物」が乱立し、現実の事件に、様々な(場合によっては裏付けのない)材料を加味して興味本位の読み物に仕立てる手法が大衆の興味をかき立てた。この中で、現実の不可解な事件の解釈役として、あるいは現実とフィクションとの媒介役として、ますます引っ張りだこの乱歩であった。

このように、プランゲ文庫は占領期の、それもわずか四年間の検閲の記録

である。それも決して完全なものではなく、メリーランド大学移管前に廃棄された検閲資料も多くあったと推測されるので、現存するものは一部に過ぎない。しかし、その中にも、乱歩はしっかりと足跡を残している。

したがって、今後、プランゲ文庫を駆使することによって、これまで明らかになっていなかった占領期の乱歩の新しい側面を見つけることができるだろう。

（立教大学　社会学部　教授）